2 文法

P5

(ア)	2	(イ)	2	(ウ)	1	(エ)	1
(オ)	3	(カ)	1	(キ)	3	(ク)	2
(ケ)	4	(コ)	4	(サ)	2	(シ)	4
(ス)	3	(セ)	4	(ソ)	3	(タ)	4
(チ)	4	(ツ)	4	(テ)	4	(ト)	3
(ナ)	2	(ニ)	4	(ヌ)	2	(ネ)	3

解説

(ア) アとエは格助詞。イは接続助詞「て」が濁ったもの。ウは接続助詞「ので」の一部。

(イ) アとエは格助詞。イは副詞「ゆっくりと」の一部。ウは接続助詞。

(ウ) いずれも格助詞。アとウは主語を示す。イは連体修飾語を作っている。エは体言の代用で、「こと」と言い換えられる。

(エ) アとウは格助詞。イは接続助詞「のに」の一部。エは形容動詞「鮮やかだ」の連用形の活用語尾。

(オ) イとウは格助詞。アは「折から」の一部。エは接続助詞。

(カ) アとウは否定の助動詞。イは補助形容詞。エは形容詞「少ない」の一部。

(キ) イとウは過去の助動詞「た」が濁ったもの。アは断定の助動詞。エは推定の助動詞「ようだ」の一部。

(ク) アとエは副助詞。イは格助詞「で」＋副助詞「も」。ウは接続助詞「ても」が濁ったもの。

(ケ) いずれも副助詞。ウとエは限定を示す。アは大体の程度を示す。イは動作が終わってまもない状態であることを示す。

(コ) イとエは接続助詞。アは副詞「きちんと」の一部。ウは格助詞。

(サ) アとエは形容動詞の連用形の活用語尾。イは副詞「まさに」の一部。ウは助動詞「ようだ」の連用形の活用語尾。

(シ) ウとエは接続助詞「て」が濁ったもの。アは断定の助動詞「だ」の連用形。イは格助詞。

(ス) いずれも助動詞「う」。アとエは意志、イは勧誘、ウは推量。

(セ) イとエは感動を示す終助詞。アは不確かであることを示す副助詞。ウは反語の意味の終助詞。

(ソ) 例文の「ように」は比喩の意味。1は推定、2は目的、4は例示の意味。

(タ) 例文の「で」は動作・作用の原因・理由を示す。1は時限、2は場所、3は手段を示す。

(チ) 例文の「ばかり」は大体の程度を示す。1は限定、2は動作が終わってまもない状態であること、3は原因・理由を示す。

(ツ) 例文の「れる」は受け身の意味。1は可能、2は尊敬、3は自発の意味。

(テ) 例文の「の」は連体修飾語を作る「の」。1は「～のもの」の意味。2は主語を示す。3は終助詞で、問いかけ・質問の意味。

(ト) 例文の「だ」は断定の助動詞。1は過去の助動詞「た」の濁ったもの、2は伝聞の助動詞「そうだ」の一部、4は形容動詞「きれいだ」の活用語尾。

(ナ) いずれも接続助詞。例文の「ば」は仮定の順接。1と4は並立、3は確定の順接。

(ニ) いずれも助動詞「た」。例文の「た」は存続。1は過去、2は想起、3は完了。

(ヌ) 例文の「そうだ」は伝聞の助動詞。1と3は様態の助動詞、4は副詞「そう」＋断定の助動詞「だ」。

(ネ) 例文の「まい」は否定の意志の助動詞。1、2、4は否定の推量の助動詞。

4 古文(1)

1 P13

(ア) 2　(イ) 3　(ウ) 3　(エ) 4　(オ) 2　(カ) 3

解説

(ア) 「かの売主」に逢って、「そなたはとどかぬ嘘を……売りつけられた」と言った人である。

(ウ) 牛の買い主が腹を立てている理由は、――線2の直前の会話文で述べられている。

(カ) 牛の買い主は、牛がからすきを一歩もひかず人を角で突こうとすると売り主に文句を言ったが、売り主は、そのようなところが真田幸村なのだと言い返した。

現代語訳

今となっては昔のことであるが、ある人が牛を売っていたところ、買い主が言うには、「この牛は、力も強く病気もないのか」と言うと、売り主が答えて言うには、「かなり力が強く、しかも丈夫である。大坂の陣でいうところの真田幸村だと思ってくれ」と言う。(買い主は)「そういうことであれば」と言って買い取った。五月になって、この牛にからすきをかけて田を耕させると、さっぱり(力が)弱くて田を耕さず、からすきを一歩もひかない。どうかすると人を見ては駆け出し、角で、突こう突こうとするので、(買い主は)「何の役にも立たない牛である。それにしてもしゃくにさわることを言って買わせたことだ。大坂の陣でいうところの真田のようだと言っていたので、さぞかし強いだろうと思っていたのに、からすきは一歩もひかず、それでいて人を見ては突こうとする」と腹を立てていた。ある時、その売り主に逢って、「あなたはすぐにばれるような嘘をついて、人を突いて、からすきをひかない牛を、真田だと言って売りつけなさった」と言うと、売り主が答えて言うには、「そうであろう。からすきは一歩もひかないだろう。人を見ては突こうとすることはそのとおりであろう。だからこそ真田と申したのだ。大坂の陣で真田は、たびたび攻撃をしたが、一歩も(後ろへ)ひいたことはなかった。その牛もひかないのだから真田だ」と言った。

---

2 P14

(ア) 3　(イ) 1　(ウ) 1　(エ) 2　(オ) 4　(カ) 2　(キ) 4

解説

(ア) この場面では、「大納言大別当」と「古老の寺僧ら」が会話をしている。

(イ) 「修復せん」の「ん」は意志を表す。あとの「いかなる聖跡重宝なりとも……押すぞかし」という言葉から、「大納言大別当」が「古老の寺僧ら」に修復を勧めていることがわかる。

(オ) 直後の僧たちの会話で詳しく説明されている。「これはただ事にあらず」の「これ」が指している内容を読み取る。

(カ) 会話文中にある「おそろしき」には「驚くべき」などの意味もあるが、ここでは現代語の「恐ろしい」と同じ意味で使われている。

現代語訳

この寺(清水寺)にある額は侍従大納言行成が書かれたものであった。(書かれてから)長い年月がたっていて文字が全部消えてわずかな墨の跡だけが見えるのを、この大納言大別当は、「文字がみな消えてしまわないうちに、私が修復しましょう」と言ったので、古参の僧侶たちは、「あんなにも高貴な人の筆跡を、どうして簡単に修復されるのだろう」と首をかしげ合っていると、「どんなに尊い方が残した立派な字であっても、跡形もなく消えてしまっては、なんの価値があるでしょうか。ことさらに勝手な筆を付け加えるのであれば支障もあるだろうけれども、わずかな墨の跡が見える時に、元の文字の上をなぞって墨の色を濃くするのであれば、どうして難しいことがありましょう。古い仏像にも(新しい)金銀の箔を張り付けるではありませんか」などと言ったところ、「まったくもっともなことだ」と言って(修復を)認めたのだった。その時(大納言大別当は)額を外して新たに下地も塗り替えて文字をなぞって修復をした。このようにするうちに次の日、急に雷雨が激しくなり、その額に雨が降り注いで、すべての墨を洗い流してまったく元と同じようになってしまった。不思議なことである。「どんな横なぐりの雨でもこのように額が濡れることはなかったのに、そのうえたとえ雨に濡れたにしろ、そのまま少しも元と変わらず彩色も文字も消えてしまうことがあるだろうか。これはただごとではない。恐ろしいことだ」と言って(僧たちが)騒いでいるうちに、四、五日して、その大納言大別当は年若くして死んでしまったということだ。